

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'79 冬

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11
婦選会館内

〒151

発行 一九七九年二月八日

婦人の10年のなかばに

嶋田道子

国連婦人の地位委員会が「女性に対する差別撤廃宣言」をしたのが一九六七年。これを拘束力のある条約にするような審議がつづけられているが、そこに入れる「同一」の教育課程をめぐって議論が湧いた。問題提起したのは日本で、「男女同一」とすると、現行の家庭科は認められないことになる。「同一」(same)でなく、一段下げた「同等」(equal)にして欲しいという提案だった。

文部省では「男女の特性に応じた教育」と

いうが、国際感覚では、もはや男女の特性に応じた教育などないというのが共通の認識になっているのである。

さて来年は婦人の10年のなかば、80年世界会議の年である。家庭科における婦人の10年前半の成果は中学の相互乗り入れだけ。私たちはこの現実を世界の人たちにどう説明していったらいいだろうか。

一月十九日出 午後一時半～四時半
於婦選会館(〇三―三七〇―〇二三八)
お話し樋口恵子さん
『海外の女性と家庭生活』
参加費 一般三〇〇円 会員一〇〇円

今年夏から秋にかけての海外旅行の報告です。朝鮮人民共和国、蒙古、イギリス、フランス、ベルギー、スイスの各国で、男女平等はどのようにすすみ、男女の役割分担はどのようになっているでしょうか――

もくじ

婦人の10年のなかばに	(1)
集会のお知らせ	(1)
授業参観報告	(2)
共学家庭科の授業参観	(3)
教科書会社訪問	(4)
文部省へ質問書	(6)
共修ということば	(6)
自治体への働きかけ・各地の動き	(7)
(大阪・宮崎・東京都知事からの回答、三重・山形・京都への要望書、京都のパンフレット、高知県婦人問題懇話会の提言、岐阜の動き)	(11)
いろいろな集会から	(11)
(女子教育問題研究会、石川女性懇話会、母と女教師の会、全国PTA問題研究会、婦人問題企画推進会議懇談会、婦人問題懇話会、国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女子たちの会)	(15)
世話人会報告	(15)
アンケート中間報告	(16)
パンフレットを売ってください	(16)

授業参観報告

—都立農産高校のユニークな共修の授業—

半田 たつ子

世話人会で、秋の集会のテーマを話し合った時、「共修の授業参観」という声が挙がり衆議一決。都立農産高校に和田さんが交渉して下さることになった。同校では保健体育の湯沢男先生が、家庭科の渡辺敦子先生と組んで授業をしていらっしゃるとのこと、男の先生が教える家庭科にも一同大いに期待した。

湯沢先生初め関係の先生方は快くOK。九月十八日に決定し案内を出す。申し込みは、新潟・長野・福島・静岡からも。品川区の行動計画作成委員の山口さんはお仲間を五人も誘い、都立野津田高校の三井さん（英語）は国語・社会の先生と共に、教科書編集者の山川さんは執筆者に呼びかけ……。電話申し込みを受けながら、この企画の成功を喜んだ。大阪の宮崎さん、神津島から十時間の船旅をしてきた丸茂さんは、前日に東京着。大学生の大山さん、新藤君、高校生文化研究会の金子さんなど、多士済々の参加者であった。いかにもバイタリティにあふれた湯沢先生

が、授業に先立って話して下さった。

「初めから、この学校を目指してきた子はほとんどいない。内申点が足りなくて、進学テストの成績が悪くて、家が貧しくて私立に行けないから……公立最低ランクの学校に送りこまれてきた子たち。かつては、農業を目ざす少年たちが集まって、学校の伝統を作ったのに、高度経済成長下、期待される人間像が学校教育の中に持ちこまれると、選別競争の法則が支配し、学校は変わった。決定的な変化は、六三年の指導要領改訂に続き、六七年、都立高校の入試に三教科、学校群制度が導入されてからだ。

数学0点、英語ひとけた。1/2プラス1/2は4という生徒たち——そして女子生徒の急増と共に「性」の問題がのしかかってきた。性が陰微な興味でとらえられ、暴走する。妊娠し休学し、出産し、復学する、という生徒も現れた。「性」を、人間としてどう生きるか、という観点から教えたかった。家庭科の男女

共修が問題になった時、両者の関連に気づいた。人間生活の基本について明らかにしながら、愛について、結婚について、性について、育児について、料理について、すべて人間がよりよく生きること、として学べるような授業があってもいいのではないかと考えた。家庭科の教師と語らい、養護教諭、生物、英語の教師も巻きこんでプロジェクトチームを作り研究を重ね、共修の家庭科を実践に移して三年目になる。最初三年生だけに試み、非常によかったという声が高いので、今年初めて二年生にも実施した。できれば来年は一年生からやりたいと考えている。」

授業は、三・四限目二M2（製造科二年）、五・六限目三M2（同三年）、いずれも組を二つに分割し、「性と保育」と「被服」（二年）「食物」（三年）の同時開講（前・後期で交代）。渡辺先生が被・食を、保健体育の湯沢先生が二年、築田先生が三年の「性と保育」を担当される。

私たちは二手に分かれて湯沢先生と渡辺先生の教室を参観した。私は三限目湯沢先生、四限目渡辺先生のお授業を見せていただくつもりであったのに、湯沢先生の教室から動けなくなってしまった。五限は三年生の「性と

保育」を、六限こそ渡辺先生の「食物」をと考えていたが、渡辺先生の六限目は食生活に関する作文を書く時間に充てられていたため、結局、共修家庭科における「性と保育」の授業だけを参観する羽目になってしまった。

二年生は四つの班に分かれて行った調査研究を、最後の班が発表した。女子四人、男子一人、幼児のおもちゃについて全員で説明する。保育園で保育さんに「取材」もしてきた。先生は鋭い質問を浴びせ、答えられないことは次時までに調べるよう指示する。次に、すでに発表をすませていた三つの班が、前時の質問について調べてきたことを述べる。母乳栄養児が罹病率の低い理由や、乳がんの発生率と母乳分泌との関連の有無など、そのものズバリの答はどんな本にも見つからなかったということ、産婦人科医を尋ねたり、知恵を絞って何とか解答をまとめてきていた。

湯沢先生は、生徒の発表を補足し、整理し、「人間が人間を育てる、とはどういうことか」と課題を与え、グループで話し合わせた。各班に入りこんで自分をぶつつける先生。「金さえあれば親はいらない」とワルがる女生徒に、先生はまっ正直に向き合う。ふと思った。自分の発言に、先生がまともにかわわってくれる……生徒にとって、これ以上の喜びがあ

るだろうか、と。にらまれ、蔑視され、黙殺される怖れなしに自分を出せる解放された生徒たち……ここまで生徒を育てるには、なみなみならぬ実践の積み重ねがあったに違いない、と。

五・六限は、若い築田先生が、三年生に人工妊娠中絶をテーマに、①男性の生理・女性の生理、②人工中絶の実態、③避妊と性の自由、④マスコミと性について発表させられた。各班女子四人男子一人という構成で、女子が男性の性器の説明を堂々と行い、男子が避妊具の実物をかざしながら、その方法をきちんと語る。発表する者も聞く者も、てれや陰微な笑いはもちろん、いささかの緊張もない。緊張したのは、生徒の数より多い参観の大人たちだったろう。「ある調査に『キスをするとされる』という設問があったが、女性は受身であるときめつけていておかしい」と疑問を持ち、このことを女性差別から障害者差別まで広げて考える発表もあり、彼らの理解の深さを語っていた。最も刺激的な媒体である週刊誌、その中のPを出している出版社に電話をかけたところ「皆が希望していることを載せているのだ」と聞き直された話など、彼らがもう果敢に大人社会にアタックしていることを示すものであった。

放課後の湯沢・渡辺両先生を囲む話し合いの席には、授業で活躍した男子生徒が、学校で今日作ったばかりのコーヒート牛乳を配ってくれて、和やかな雰囲気広がった。

主な質問は①「性と保育」と保健体育の中の「保健」の授業との関係、②いわゆる家庭科的な教育内容、③学校全体の教育民主化への取り組みなど。お答えは①「保健」では自分の身体の機能を取り上げ、性教育はしていない、②二年では現在の家庭生活の問題、家族の法律、被服製作（自由課題）、三年では食生活と家庭経済をやっている。住居、家庭経営は現状ではやむなくカットしている。③については感動的な取り組みをうかがったが、ここには書き尽くせないのもので、「若者はいま歩みはじめ」今崎暁巳著・労働旬報社刊をぜひお読みいただきたい。

人間が生きていく営みをきちんと学ぶ授業——それを男女共修の家庭科の上に花開かせ、生徒自身に退廃状況から脱出する力をつけさせる——これが東京都立農産高校の目を見張る実践であった。

◇ ◇ ◇
なお、十一月十五日夜、一ツ橋高校定時制で第二回の授業参観を行いました。その報告は次号に掲載します。（編集部）

ぜひ、にとおすめしたい
ぜひ、にと継続をお願いしたい
「共学家庭科の授業参観」

長野県梓川高校 佐藤美枝子

去る九月一八日、都立農産高校の共学家庭科授業参観と研究会を、全国各地からのお仲間（性別・職業・年令を問わぬ）と共にする機会に恵まれ、長野県から参加した共学実践校の三名の教師は、心強さを感じて帰信しました。

上水内北部高校の小林先生は、早速、職場新聞で「ピカピカな古い木造校舎で、伸び伸びと、生き生きと、グループ学習する生徒の姿と、実践記録」若者は今歩みはじめる（今崎暁巳・労働旬報社）の中にもある、同校の教師集団の教育力の偉大さ」を報じ、新卒であり共学実践一年目の中村先生は、講座人数がすくなく（ $\frac{1}{2}$ クラス）師弟間の親近感が得やすい点、男性教師が共学家庭科の積極的な実践者である強み、各教科が、総合実習を中心において関連のある授業展開をしている点等々に、羨望と驚きをこめた感激を綴っております。私は築田先生（若き女性）御指

導の三年生授業「性にかかわる学習」のグループ研究発表を見学・内容の深さもさることながら、科学的な、スッパリした発表態度、聞く態度が好ましく、自分の実践から得ている「共学共修」への確信が高められました。

別学共修提唱の方々も一度参観すれば、共学の必然性と意義が目で掴める苦。
今後とも再々企画していただき、此の機を全国レベルの研究・交流・はげましの根城にしたいだけたらと考えております。

教科書会社訪問

新しい高校教科書を少しでもよいものにするために、世話人は教科書会社の担当者との話し合いを続けています。

1. 一ツ橋出版

8月17日。梶谷、駒野が訪問。

中村課長と家庭科教科書担当者の山川さん（女性）らが出席。シエアが少い後発の会社なので、「新味を出した編集を」と共修の方向に関心の強い態度。著者陣を一新して、性別役割にとらわれない編集方針でとりくんでいる、との積極的の回答を得た。共働き、福祉などについて、社会的視点で取り上げることなどの要望にも共感を示し、すでに、私たちの会の主張にもかなり理解をもっている様子。新しい著者たちとの打合わせも終り、原稿も

2. 教育図書

9月3日。青木、梶谷、駒野が訪問。

家庭科教科書出版の歴史も長く、シエアも高い会社で、文部省や、以前からの著者たちとのつながりが深いせいか、全般的に現状維持の姿勢が強い。家庭科教科書でも編集責任者の女性は一人もいないとのこと。

「会の主張はわかる」と言いながら、検定課や、現場の先生の意識は、あまり変わっていないことを強調し、教科書の問題点の具体的な指摘や、社会的な視点をもって教材をえらび、女だけが対象ではない編集方針を、という要望にも、あまり積極的な回答は引き出せなかった。次の教科書の著者も、中心メンバーは今までとあまり変えず、一部変更だけ、ということなので、新しい傾向はとも期待できそうになかった。原稿が、ぼつぼつ集まってきている段階だ、とのこと、編集の進行状況は、他社と同じか、や、進んでいる感じ。現場の先生の声もいろいろ聞いている、というが、これまでこの教科書を使用していた比較的保守的な先生たちの声が中心らしく、その人たちの支持を失うことは得策でない、という姿勢もあるようだ。

3. 中教出版

9月10日。中嶋、和田、駒野が訪問。

「うちの教科書は、そんなに性別役割を強調していない」と宮崎部長。たしかに、文中では、それほど女子向きを出してはいないが、巻頭のライフ・サイクルの表や、被服のさし絵など、実例を示して迫ると、や、閉口の様

子。ここでも「現場の先生が採択してくれなければ困るので……」と、現場の先生の意識が持ち出される。

会の主張は一応理解しているようだし、「役割分担の色彩は極力排除して、両性に通用するような編集方針をとっていくつもりだ。これまでも実技関係のところ以外は、そのようにやってきている」と強調。

経済政策、生活保障、共働き、保育所など現代的な課題を積極的にもりこんでほしい、との要望に対しては、趣旨はよくわかる、何とか期待にはそいたい……と歯切れが悪い。やはり、シエアの多い会社では、従来の採択者の意向を無視できないという共通の悩みがあるからだろうか。

（駒野陽子）

4. 東京書籍

9月17日。

家庭科の若い編集者（男性でしたが）から新しい教科書の編集に関しては、

- (1) 小学校の場合は、登場人物を男女対等にするのが実現できた。
- (2) 中学校についても、男女共学の可能性が高い「被服I」「食物I」の領域では、共

学に合うような教材を考えている。

- (3) しかし、高校「家庭一般」は女子向きの性格が強いので、やりにくい。しかし「食物」の領域などは、性別の観念は全く持たずにすすめている。

との経過説明がありました。

それを受けて、こちら側からは次の点を強調しました。

- (1) 「家庭一般」の男子選択が可能になった新教科書から、女子向きイメージを払拭して頂きたい。そのためにも現在の教科書のように、スタイル写真のモデルを女子に限定することは改めてほしい（教図、中教、実教のいずれもそうになっている）。必要があれば男子のモデルも登場させること、たとえばブラウスとシャツ、スカートとズボンというように。
- (2) 被服製作の教材にしても、共学でとりくめる物はいくらもある。
- (3) 「解説」では、男女によって既習内容に差があるようにしている、しかし現実には、男女差より学校差の方が大きい。だから高校では一律に扱っても不都合はない。
- (4) ホームプロ、学校家庭クラブの取扱いが、ボランティア政策の下請け的なものにならないように配慮してもらいたい。

（和田典子）

文部省職業教育課長及び 小笠原ゆ里視学官へ質問書

さる、五月末に発行された「高等学校学習指導要領解説、家庭編」について、左の質問書を提出しました。(九月二十日付)しかし、十月末日現在になっても回答を手にすることはできませんでした。

さる五月三十日、貴省より発行されました頭書の刊行物について、左記の諸点に関してお伺い致したく、ご面倒でも文書による回答をお願いいたします。

一、本書は、学習指導要領を解説したものであって、あくまでも各学校において作成する指導計画の参考にするという性格のものであり、拘束性をもつものではない、と受けとめてよろしいのでしょうか。

二、「家庭一般」の目標にだけ「家庭経営の立場から」の語が入り、被服製作の題材として「ワンピースドレス、ジャンパースカート……22頁7～8行目」がしめされるなど、この科目の性格を女子向きとふまえている意向

がうかがわれ、男子の選択履修に消極的な姿勢が流れていますがその理由をきかせて下さい。

三、5頁終りから3行目に「男子と女子の学習してくる内容についてはかなりの差があるので……」の記述がみられますが、中学校学習指導要領の規定に準拠しても全領域の男女共学は可能であり、既にそのような実践もすすんでいます。また、学校毎の自由裁量を認めた今次改訂の意図からいえば、学習内容の差は男女間よりもむしろ学校間にあることの方が問題だと思いますがいかがでしょうか。

尚、中学校指導書137頁12行目(4)項で「すべての女子生徒に被服1、2及び食物1、2を履修させるよう計画することが望ましい」とあるのを前提とした内容編成であるとすれば、中学校技術・家庭科の学習指導要領の趣旨にそわないではありませんか。

四、今次改訂で、あらたに教育内容としてホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動が加

えられ、従来の学習方法としてではなく「問題解決能力及び勤労、愛情、奉仕などの精神を養うことを目標とする……6頁終りの行17頁」領域として位置づけられています。ここでいう「問題解決能力」とはどのような認識力をさすのですか。また、それぞれ異なる家庭生活問題の現状把握やその要因分析は指導できるとしても、その解決には限界があるように思いますが、その点についてはどのようにお考えですか。

(和田典子)

共修ということば

本会では、「共修」「共学」ということばを原則として同じ意味で使っています。男女がいっしょに同じ教室で同じ内容の学習をするという意味です。

文部省側から「別学」でも「共修」という言い方が出て来たために、運動する側では「共学」ということばが多く使われるようになりましたが、最近日教組では「共修」ということに決めたそうです。

(編集部)

自治体への働きかけ・各地の動き

大阪府・宮崎県知事の アンケートへの回答

前号で新知事へのアンケートの結果をご紹介しましたが、大阪府知事からの回答が遅れて届きました。その後宮崎県知事の改選もありましたので、アンケートを発送、回答を得ました。

質問一、固定的な男女の役割分担意識を改め、女性の社会参加を促進する政策をすすめるかについて。

◆大阪府知事 すすめる。

固定的な役割分担意識を改め、女性の社会参加を促進することは、男女が社会のあらゆる分野に平等に参加するという意味でも、また女性の能力やエネルギーを社会の発展のために活用するという意味でも、重要な課題であると考えている。

女性の社会参加を進めるためには、保育所

をはじめとする社会的サービス機能の充実にも取り組まねばならないところであるが、当面、固定的な役割分担意識を解消するための啓発や、審議会等に女性を登用することによって、社会全体の気運を盛り上げていきたいと考えている。

大阪府では、婦人問題推進会議によって、「女性の地位向上に関する提言」がまとめられ、中広い課題が提起されているので、今後「大阪府婦人問題企画推進本部」を設置し、中、長期的な視点からも、体系的、総合的に婦人問題に取り組んでいきたい。

◆宮崎県知事 すすめる。

(1)昭和54年5月、行政組織規則の一部を改正し、青少年課を青少年婦人課に改め、婦人関係行政の総合調整に当たっている。

(2)婦人のあらゆる問題について調査審議し、広く県民の意向を行政施策に反映させるための県民各層各界の代表からなる懇話会の設置を準備中である。

(3)その他、婦人問題に関する県民の関心と理解を深めるための活動及び宮崎県の実情に即

した県内行動計画を策定する。

質問二、男女平等教育を積極的にすすめるかについて。

◆大阪府知事 すすめる。

御指摘のように、学校教育の果たすべき役割は重要であると考えている。

このことの推進については、学校教育の全般的な活動を通して進めていく性質のものと考えている。

◆宮崎県知事 なんともしない。

質問の意図が明確でない。

男女平等は教育の基本であり、学校教育の根底にはそのことが十分ふまえられていると思う。

質問三、中学校の「技術・家庭」、高等学校の「家庭一般」の男女共修をすすめるかについて。

◆大阪府知事 すすめる。

中学校「技術・家庭」、高等学校「家庭一般」について、男女生徒がともに履修できるように配慮する必要があるとの観点から、研究を継続しているところである。

◆宮崎県知事 すすめない。

新学習指導要領に即して実施する。

(梶谷典子)

東京都知事からの回答

六月に出した質問の回答が九月末にやっと届きました。(夏・秋号参照)

質問一、教育庁指導部長の回答が都行動計画の精神にそっているかについて。

回答 東京都教育委員会では、「婦人問題解決のための東京都行動計画」にそって事業がすすめられているかと考えております。

質問二、共修をすすめるための、側面からの努力について。

回答 東京都教育委員会と協議しながら、「婦人問題解決のための東京都行動計画」の趣旨にそって施策が推進されるよう努力してまいります。

実にそっけない回答ですが、この質問が届いたことをきっかけにして、教育庁内で都行動計画についてだいが話し合いが行われたもので、ある程度の効果はあったと言えます。

京都では

パンフレット

「家庭一般―男女共修のあゆみ―」
ができました

すべて社会も学校も家庭生活も、男女協力の上に成立しています。学問・教育においても真理は一つです。男子向き、女子向きなどというものはあるはずはないのです。それなのに、高校においては「家庭一般」は女子のみに四単位必修と文部省はきめています。これは、女は家庭、男は仕事という性による役割分業に固執し、性差別思想にもとづいているものといえるのです。

京都においては、昭和四十八年度改訂を機に全府立高校において「家庭一般」を先ず二単位男女共通必修とし、五年余の実践を積み上げて来ました。高校三原則の一つの柱「男女共学」の精神をさらに発展させ、制度を教育の内容として充実させて、すべての生徒たちが、生活に対する科学的認識をきちんと持

三重県・山形県へ要望書

△三重県▽

三重県は六月に婦人行動計画「三重県の婦人対策の方向」を発表しています。

基本的な考え方は国内行動計画を写したようなもの、目標年次は昭和六〇年とされていますが、何をいつまでにという段階的、具体的な計画はなく、県自身、国、民間団体、企業、女性自身のなすべきことが混然と羅列されていて、行政の責任ある立場としての施策推進の姿勢があまりみえません。

教育についても具体性に乏しく、学校教育の充実の項でも「男女平等及び相互の理解についての学習内容の充実をはかる」というだけ。家庭科についてはひとつとも触れられていません。

そこで十月二十二日に要望書を発送、右のような「会」としての意見を伝えるとともに、具体的な年次計画を設定すること、中学校の「技術・家庭」、高等学校の「家庭一般」の男女共修をすすめることを要望しました。

△山形県▽

山形県の行動計画については秋号でお知らせしましたが、これに対しては次のような要望書を送りました。

山形県行動計画において、「男女差別の解消」「男女の役割分担意識の見直し」「男女平等をすすめるための教育の推進」がはっきりうたわれ、家庭科教育についても改善する姿勢が示されたことはたいへん喜ばしいことです。

けれども、家庭科教育をどのように改善すべきなのか明確でないのが残念です。

男女平等教育を教育課程に位置づけ、伝統的な男女の役割分担意識にとらわれない教育をすすめるためには、「女子のみ必修」や、「学習領域の男女別の指定」はあってはなりません。中学校の「技術・家庭」、高等学校の「家庭一般」は当然男女共修(同じ内容を男女がいっしょに学ぶ)でなければなりません。

これから行動計画にそって施策をすすめるにあたっては、必ず「技術・家庭」「家庭一般」の男女共修を実施されますよう要望いたします。(梶谷典子)

ち、生活自立の力を身につけるようにと努力を重ねているところです。

私達家庭科研究会は、五十七年度改訂後もこの男女共修「家庭一般」を一層定着・発展させていくために、ここ数年間の歩みをまとめ、その成果と課題を明らかにしようとしたのがこのパンフレットです。

数多くの悪条件の中で、まだよちよち歩きではありますが、全国の幅広い方々のご理解ご支援を頂いて、強く大きく成長したいと思っています。

お問合わせは、

京都府綴喜郡田辺町河原

京都府立田辺高等学校 森 幸枝

Tel. 〇七七四六二一〇七五二・三

価格は、一部 二〇〇円 (森幸枝)

―共修を後退させるな―

京都府・市と教職員組合へ要望書

京都では、五十七年度の改訂を目ざして「高等学校教育課程検討委員会」が今年二月六日に発足しています。四十八年度改訂の際は「教育課程審議委員会」。この会が男女共修の家

庭科を答申したので、制度として保障されたのです。今回の検討委員会は、基本精神こそ前回と同じですが、委員の構成が全く変わりました。前回は二三名の委員のうち八名が教科研究会から選出されていましたが、今回はこの種の委員が全部欠落し、代わりに教頭が入ったこと。校長・教頭には共修に対して批判的な委員が多いことなどから、京都の先生方は不安な様子です。

会では早速、京都府市の行政に対して「絶対に後退させるな」、教職員組合に対して「共修家庭科を守る運動の中心になって闘ってほしい」という要望書を送りました。

その後の情勢として、九月四日、各教科の代表者会議が開かれ、検討委員会に向けて、共修の存続を要望したということです。本会からの要望書は、家庭科教育研究者連盟(会長は和田典子さん)の要望書と共に、府教委をはじめ各あて先に持参し、有効に活用すること。十月中旬には検討委員会が開かれ、十月二十日ごろまでには山を越すとのことです。京都府が戦後一貫して守ってきた民主教育、高校三原則、その上に花開いた共修家庭科を、絶対に守り抜かなければなりません。府知事選に敗れた重大な失点を、今更のよう

高知県婦人問題懇話会の 提言について

鈴木 敏子
(懇話会委員)

高知県婦人問題懇話会は、去る八月「高知県婦人の発展と平等をめざして」県計画策定への提言」をまとめ知事へ提出しました。

同会は、一九七七年七月、県内各界の二五名(男八、女一七)に委嘱して設置されたもので、六回にわたり会の進め方や県の婦人関連施策について全員で意見交流をした後、七八年一月二〇日に提言の原案を作成する五名の小委員を選出しました。以来、十回余の小委員会でもねりあげた原案を、再度全体会に計って懇話会の総意とし、発表したものです。

全体は「基本的な考え方」「提言の一般的な背景」「提言の内容」の三部構成で、「提言の内容」は教育、労働、家庭、福祉、社会参加の五分野にわたり、各々「現状と基本的な考え方」と「提言の趣旨」を述べた上で具体的な提言を行い、最後に「高知県民の皆様へ」として婦人問題の正しい認識と協力を呼びかけました。我々が特に留意したことは、

日本国憲法の基本的理念「民主主義と平和、個人の尊厳と両性の平等など」を貫こうとしたこと、高知県の特殊性、独自性を考慮しようとしたことにあると思います。

以下、家庭科に關係した箇所を紹介します。

「憲法と教育基本法にもとづき……男女平等教育は教育の基本的な課題である」との基本的姿勢に照して、明治以降の日本の学校教育、女子教育の特徴を簡単に記し、戦後においては家庭科の女子のみ必修等、男女平等教育の後退がみられる一方、国際婦人年を契機としてこのような傾向を見直す動きもあることを指摘し(一二頁)、「新しい時代に対応しうる教育内容をもつ家庭科の編成が、家庭科教員や行政担当者、教員養成関係者、研究者の相互協力によって行われることが必要であり、男女共に学ぶ家庭科の在り方が求められるべきである(一二頁)」という教育の現状と基本的な考え方をうけて、「学校教育の内容および制度の改善」の柱で「とくに家庭科は男女共学を前提として、男女平等教育の中心科目とされ得る。そして平和で民主的な家庭づくりをめざし、発達段階に対応し得るような教科内容の拡大・充実が求められる。」(一五頁)という「提言の趣旨」に対して次のような提言項目をつくりました。

⑤ 家庭科の教科内容を充実・拡大し、男女共学の必修科目にする。(一六頁)

また、教育の背景では、県が一九七七年に実施した県内婦人の意識調査の結果、家庭科を女子だけの教科としない見方が多いという実態も紹介しました(四頁)。

岐阜では

八月十九日、岐阜での集会に出席しました。世話人尾藤操さんは、会員を中心に幅広く呼びかけて下さって、会場ギリギリの四〇人余の方が集まられました。その場で会費を集め、入会を誘い(新入会員九名)アイウエオ順に名簿を完成して下さるなど、非常に行き届いたご手配に感謝感激しました。年一回はこういう会を設けようと話し合われ、「低学年からの家庭科指導」を考える会を作ろうという提案がありました。岐阜の高等学校家庭科には、難しい情勢があるために、高等学校からお一人も参加されなかったのは残念でしたが、小・中の先生、学生、主婦など和やかに心の通い合う会で、世話人の尾藤さんのお骨折りを深く感じました。

(半田たつ子)

いろいろな集会から

第四回全国高校女子教育問題研究会 に参加して(広島)

芦谷 薫

原爆ドームの真前で、広島大会は八月十九日から三日間開かれた。

「労働と愛の意味と権利を正しく語りつぐために」の大会テーマのもとに、「変革期を生きる愛を求めて」(読書会形式)、「労働権をどう教えるか」「愛の権利をどう教えるか」という三つの討論の場が設けられた。HRや教科(家庭科・英語・倫社・国語)の実践が報告されたが、県によっては県高教組を中心に組織的な取り組みが行なわれてい、ロングホームルーム等で「女性の自立と労働権」といった内容を年間カリキュラムに組み入れた、学校全体としての取り組みの様子が聞けて心強く感じました。

しかし、家庭科については、保育や家庭経営の中で、新しい家庭像や人間関係、愛や労働の権利をどう教材化し実践したかについて

のレポートは多く出されたが、女子研としては家庭科の男女共修についてどのように取り組もうとしているのか、この点についての討論はなされなかった。これについて、大阪西成高校から何度か問題提起がされた。西成高校は、在日朝鮮人や部落出身者、障害者が在籍し、教育体制の差別選別体制と戦うため、部落解放、朝鮮人解放、障害者解放、女性解放という四つの教育の柱をたてているという。そして、家庭科の男女共修を教師集団で確認し実施しているが、教える方も家庭科の女子教員に加えて理科と英語の男子教員三名が仮免許を取って教えている。共修の家庭科を実施して五年になるというが、それは家庭科の女子教員が、「共修を実施しないなら学校をやめる。全部体育にすればよい」と強く引き下がらぬ姿勢で教師集団に訴えた中から生まれた。しかし西成高校の男女共修家庭科は、府知事が変わったこともあり、二、三年後にはつぶされる可能性がある、この大会に参加した男子家庭科教員は訴え、この会でも教育の差別体制の問題に正面から取り組んでいく

べきではないかと問題点を投げかけた。

西成高校からの問題提起に賛意を示した私は、今後、女子研がこの問題提起をどのように受けとめていくのか、注目していきたい。

石川女性懇話会との交流会報告

坂本ななえ

8月21、22日、金沢にて交流会を持ち、さらに県庁への抗議行動をも共にした。

石川の女性差別は他県より一段と強固とのこと。この会のメンバーの多くも、運動以前に自らの暴力に悩む現状である。

それに加えて行政側の意識がひどく低い。県行動計画の作成もまだ白紙同然のありさまで、婦人対策ならどこか見学でもさせておけばそれで良い、と思っているようだ。学校教育の中の差別への反省などチリはどもなし。

懇話会の会員の一人(高校家庭科教員)は共修にとり組もうとしたとたんに転動させられたという。それも、皮肉なことに女子ばかりの家庭科コースへ。

まさに前途多難な石川の状況だが、それだけに会の今後の活動に期待が持てる。なぜか明るい気持ちで交流会を終えたのは、年令も

職業も意識もさまざまなこの会のメンバーに
共通の、強さと熱意に触れたためだろう。

母と女教師の会（関東ブロック）

駒野 陽子

8月18・19日、箱根湯元で開かれた「母と女教師の会」関東ブロック集会の女子教育分科会に参加。小・中の家庭科の先生の参加も多く、女子教育の問題の第一として、中学の技術・家庭科の男女別学、高校家庭科の女子のみ必修があげられたが、性別役割がなぜ差別につながるか、さえまだ十分に理解できない人もあり、社会通念を変えることのむずかしさを痛感。教科書の中の性差別、教師や母親の意識の変革などが討論された。日教組奥山えみ子婦人部長がまとめとして、家庭科女子のみ必修の教育課程の問題性を強調され、現場の教師のまず取り組むべき課題として家庭科男女共学をあげられたのは心強かった。

全P研の全国大会から

馬場 洋子

全国PTA問題研究会の第八回全国大会は

婦人問題懇話会では――

中嶋 里美

〔夏合宿より〕

去る八月十一、十二日に婦人問題懇話会の合宿が国立婦人教育会館で行われた。討論のテーマは自民党の家庭基盤の充実に関する対策要綱についてであった。

自民党の家族政策の歴史の流れを追っていくと、家族の一人一人の問題を社会的に解決していくというよりも、すべてのひずみを含めて家族内で解決せよという方針が一貫している。私たちの側がこれに対してどう対応していくのかしかりとした見通しを持たない限り、家族主義の中に取こまれ、とりわけ女性達は一箇の人間としての諸権利を奪われてしまう危険性がある。

「基本的考え方」の冒頭の部分に「家庭は社会の基本単位であり」とあるが、家庭を作るか作らないかは、個人の選択であるから「社会の基本単位は個人である」と改めた方がよい、「家庭の日」という祝日を新設する

「子供の幸せとPTA」をメインテーマに、八月二十、二十一日、東京・日本教育会館で開催。全体会のシンポジウムでは「戦後教育は日本をダメにしたか」をテーマに、室俊司、野呂重雄、永畑道子の諸氏を講師に話し合いました。

永畑氏は「子供の現実を見ると、日本はダメになった」とさらに「親自身の退廃、特に母親はすごく深刻（父親は問題にならない）、次に先生たちの退廃」を指摘。「戦前教育と全く同じものが残っていて、戦後教育をダメにした」と「教育を考えるものは教育を裏切っていないといけない」という言葉には、参加者、うなづいていました。

婦人問題企画推進会議懇談会で

「会」の取り組みを報告

半田たつ子

国際婦人年に際し、民間の有識者によって設置された婦人問題企画推進会議が、一九七六年十一月、家庭科男女共修について具体的な「意見」を提出したのに、教育課程の答申にも「国内行動計画」にも、きちんと生かされなかったことはご承知の通りです。

同会議は、その後も分科会を設けて懇談会

ことよりも、学令以前の子供を持つ親の労働時間の短縮をした方がよい、家庭科を共修にして、家庭の意義についての自覚を深めるとあるが、共修を通して生活を大切にすること、うことを教えていくという風に改めるべきではないか等について話合われた。

「平等」か「同一」か

――十月定例会より――

十月十三日農林省、南青山会館に、国連第三三回総会への日本政府代表として派遣された高橋展子氏を迎え、「女性に対する差別撤廃に関する国際条約（案）」が出来るまでの過程について話をしていた。

一九六七年の第二二回国連総会で「女性に対する差別撤廃に関する国連宣言」が満場一致で採択されたが、宣言だけでは拘束力がないので、国際条約にして批准した国にはそれを守ることを義務づけるようにしたいということで条約（案）が作られてきている。今年中に、この案の審議を終わらせる予定のようだ。こうした中で、「平等」か「同一」かが問題になったのは昨年の総会の時であった。しかもその問題は日本が提案国であった。条約の第十条は教育を受ける権利の保障についての

を開いてきましたが、その一環として「状況改善委員会」が「婦人の地位向上と教育」をテーマに、八月二十四日後、霞ヶ関ビルの東海倶楽部で会合を開きました。報告を求められたのは、家庭科の男女共修をすすめる会、国際婦人年をきっかけとして行動を起こす私たちの会（教育分科会）、大学婦人協会です。「会」からは、梶谷、中島、半田が出席。半田が会の活動と、教育学者百氏対象の調査、小学生と家庭科の調査を中心に報告。「行動を起こす会」は、最近一冊のパンフにまとめた「教科書の中の女性像」について、大学婦人協会は、高等教育を受けた婦人の社会参加について報告しました。

初めの二つの会の報告は固定的な性別役割分担意識を払拭する教育によって、男女平等をすすめる、性差別をなくすという観点で重なりますが、大学婦人協会では、夫々の立場において社会向上のために尽くすことを使命としているようで、性差別への憤りはやや薄く、文部省の補助金で調査研究を行っています。出席者は、同会議委員、婦人問題担当室係官の他、各省庁役人でした。

（会報夏号では「現状改善委員会」とおしらせしましたが状況改善委員会の誤りでした。おわびして訂正させていただきます。編集部）

規定であるが、その(6)に「当該教育機関が、男女共学制度であるかを問わず、同一の教育課程、同一の試験、同水準の資格をもつ教職員及び同質の学校設備、施設に対する同一な機会」という項がある。高橋氏が国連に出席する前に各省と打合わせをしたのであるが、右の項の同一という語を「平等」又は「同等」という言葉に直す修正案を出して欲しいと言われた。（勿論、文部省からですよ）

高橋さんは政府代表であるので言わざるを得ない立場であり、「ユネスコ条約にも同等という言葉が使われているのだから、それと同じように、同一を平等又は同等と変えてもいいではないか」と発言したところ、どうしてそんな古いものを引合いに出すのか、ユネスコ条約を改めるべきだ、差別されている側にとっては「平等」や「同等」はしばしばまやかしに利用されてきたのだ、と各国から猛反撃をくらって四面楚歌になったと言った。

日本政府が何故このような修正案を出したかという、「男女の特性に応じた教育のため」なのである。国連レベルではもう「男女の特性」などという言葉は全くまやかしでしかないと思われているのだ。私たちはこの話をもっと大きく広げる必要がある。

国際婦人年をきっかけとして 行動を起こす女たちの会では――

79 夏 合 宿

仲野 暢子

八月十八・十九日、オリンピック青少年センターで行われた合宿のテーマは「家族とは家庭とは」。

先号でも紹介された自民党の「家庭基盤充実」政策のねらいが「日本古来の美風を生かして、経済や社会制度上の不備を吸収し得る」家庭作りであり、「老親の介護と子供の育成は家庭の責務」とされていることに對し、私たちの目指す家族のあり方について討論が続いた。

デパートの婚礼コーナーに現れるのは当事者よりも親が自分のこととして夢中である実情。スキニシップが錦の御旗で、育児休業の強制があるのでは？ 低賃金で生涯働き続けた女より、夫に奉仕した女の方が年金が多くなるという制度はどうか？ 家庭内での性別役割固定にどう立ち向うべきか。

家族について、必ずしも血縁にこだわらない共同生活もあり得るという報告があり、現在の日本では血縁家庭を社会の単位とする考えが、官民を問わず支配的であって、とくに女の場合、個人として扱われないこと。自宅通勤を原則とする女子の就職。中年過ぎた女ひとりアパートも入居を断られる。

こうした中で、男女ともに経済的にも生活面でも自立できる人間を育て、社会的制度的に要求しよう。男も育児や家事ができるような教育と労働条件を、できるところから行動しようということでききない話を聞いた。

十月例会

「女はこうして作られる――教科書の
中の性差別――」は何故できたか

安達 幸子

十月二十八日、代々木青少年センターにて、行動する会教育分科会が作ったパンフ「女はこうして……」をめぐる討論集会を開いた。このパンフは、会員が、国語・社会・英語・家庭・保健の各教科にわたって教科書の性差別記述をチェックしたもので、教科書はどれも「男は仕事・女は家庭」という性別役割分業を固定化していく内容のものばかり。

集会には、パンフを読んだ人等五十数名が

参加。パンフ製作者が製作意図・感想など語り、その後会場討論が活発に行われた。小学校から大学・訓練校と、あらゆる教育の場の、家庭の中の、体験談が次々と出てくる。差別をなくすためには、自分のまわりの教師・学生・生徒や教科書会社に働きかけなければ。

「女は家庭」という役割分業を、何の疑問ももたずに受け入れてしまう原因の一つに「家庭科」がある。ぜひ必修に、という発言、役割分業意識は、家庭で男の子に家事を手伝わせることで、変わっていくのではないか、という提言などがあつた。

最後に、差別をなくすための今後の行動を提起。一つは「教室の中の性差別」を集めて日常の差別を意識すること、もう一つは、教科書会社や文部省・教組に要望書を送ること。この要望書を採用して集会を終えた。

☆パンフの申し込み先

新宿区若葉一の十グリーンマンションD号
国際婦人年をきっかけとして行動を起こす
女たちの会教育分科会（送料共四百二十円）

☆「教室の中の性差別」語録募集

教育分科会 性差別語録募集係 まで
発言内容、発言者、どう対応したかを。

◇ ◇ ◇

集会についての情報をお待ちします（編集部）

世話人会報告

△九月一日▽

◇九月十八日の共修実践校（都立農産高校）授業参観について――当日の係を分担。

◇出版労連・教科書対策委員会から「現行教科書のあり方および教科書貸与制について」アンケート依頼があり、回答を皆で検討。

◇五月末に出た「高校学習指導要領解説（家庭編）」についての質問状を文部省へ出すことに決定（和田が原案担当）

◇「三重県の行動計画」が出されたが、学校教育に関してはたったの三行だけ！ 意見書を提出することに決定（駒野が原案担当）

◇京都では、従来の教育課程審議委員会が教育課程検討委員会に改められ、京都独自の教育課程を検討しているが、それに対し、家庭科の男女共学を存続させるよう、申し入れをすることになる（半田が原案担当）

◇教科書会社との話し合いが駒野を中心に進行中。九月中に教育図書、中教出版を予定している。（馬場洋子）

△九月二十九日▽

教科書会社訪問の結果や、各集会の模様、各地域の状況などについて報告し合ったあと、

次のようなことを話し合いました。

◎大学の文化祭シーズンだし、ほかにいろいろな集会があるからアピールに出かけたいところだが、今年はそのエネルギーがない。
◎オレンジパンフをつくったら、次には「家庭科、なぜ女だけ？」の続編をつくりたい。
◎世話人へのアンケートの結果では「地域で調査ができる」という人が多い。どんな調査をやったらよいか考えてみよう。

（梶谷典子）

△十月十八日▽

世話人七名と、戸山高校家庭科の斉藤先生（もと都立農林高教諭）で、オレンジ・パンフ「家庭一般の男女共学をどうすすめるか」の作成について討議。

はじめに、斉藤先生から、都立農林高校での共学実践について次のようなお話を聞いた。「職業高なので『他の教科も含めて、すべての教科の男女共学を』という視点で学校ぐるみ検討をした。七人の家庭科教師が『誰でもできる共学の授業を』というねらいで、単元毎に分担して自主教材、スライドなどをつくり、年々カリキュラム、授業案、教材などをファイルし、再検討し、改善した。生徒の反応も年々よくなっている。定着したといえる。都高教でも、関心が強く、①どうやっ

て学校ぐるみの態勢ができたのか②教育課程をどう組めば可能か③内容はどんなものを……などの、質問が多い」

以上のお話を参考に、オレンジ・パンフの構想を以下のようにまとめた。

(1) スタイルは、ピンク・パンフと同じ。32ページ、三百円定価とする。二千部印刷。
(2) 来年、夏までに完成。原稿は春休みまでに。
(3) 内容

- ・ 社会の動き、意識の変化、高校生の実態などをふまえて、共学のすすめを……
- ・ 地域ぐるみ、学校ぐるみの実践例
- ・ 授業報告
- ・ 各地の運動の動き
- ・ 共学家庭科の全体構想
- ・ 全国の共学実施状況（アンケート調査でまとめる）
- ・ 会の運動、その後・会の紹介と入会おすめなど

佐藤・馬場・半田・和田の四人を中心に、作成をすすめる。次の世話人会で更に検討の予定。

（駒野陽子）

オレンジ・パンフの発行はもう少し早くなる予定です。（編集部）

アンケート中間報告

皆様にお願いましたアンケートのなかのご意見をご紹介しましょう。(まとめは次号)

▽会報についてのご希望

○知りたい問題

全国の共修実施状況。全国的な運動状況。情勢。外国の様子。実施校が共修を廃止した背景。家庭科の現状。共修のカリキュラムの内容。新教科書の内容。等々。

○読みたい記事

共修実践例。共修実施校の様子。共修をとりまく情勢。集会報告・研究報告。全日・定時制別必修共修校数とその内容。共修にこぎつけるまでの教師集団への働きかけ。女子への差別とその根源。等々。

○その他

行政の動き。連帯を強めるためのもの。更に実施に向けて未実施校の取り組み状況。父母、同僚の賛同を得るための企画。今までの通り会の活動予定報告。

▽運動のため、あなたのできること、地域の状況、共修運動についてのご意見

私は国語科ですが、学校内での根まわし、

議論を深めることなど協力すべきと思います。勤務校は今年度から共学です。

○女子高だが共学の内容でやりたい。

○勤務校と関連の数校で共修をすすめたい。

○いわゆる消費者問題、消費者運動と共修運動との接近を考えたいと思っている。

○家庭科教師が五人いるが、内部での意思統一が大変むづかしく困っている。

○講義や講演等で共修問題に触れていますが、とくに青年男女学生、なかでも女子学生から必ず「爆笑」が起こります。なぜ「笑う」のかは今後の研究の対象でもあり、笑いから共感へ上昇させることが、一つの課題でもあります。

○どんなにすばらしい内容の家庭科でもそれが女子だけを対象にしている限り、性別役割分業、女性差別を固定、助長する役割を果たしてしまう。共修をすすめるために、女子のみの必修ならば拒否する斗いが必要なのではないか。

○運動の輪を拡げるために地域での話し合いや意見の発表・調査研究、パンフレットの販売・会員の拡大などは、努力して積極的に取り組みたいです。

ご協力どうもありがとうございました。

(青山和世)

△パンフレットを売ってください▽

アンケートに対して「パンフレットの販売ができる」というお答えがかなりありました。ご希望の部数を事務局まで郵便でおしらせくださればお送りします。現物が届きましたらなるべくお早めに代金、郵送料を振り込んでくださいますように。

郵便振替の番号〓東京九一―九一八九一

▽家庭科の男女共修をめぐる一問一答

愛称「黄パンフ」。基本的な考え方をわかりやすくまとめた一般向のパンフレット。

B 6版36ページ。一部百円。送料六十円。

▽男女共修の家庭科で何を教えるか

愛称「赤パンフ」。残部は少なくなりました。中学・高校の実践例を中心にまとめた現場向のパンフレット。

B 5版32ページ。一部二百円、送料百四十円。

▽中学校技術・家庭科の男女共学をどうすすめるか

愛称「ピンク・パンフ」。実践例を中心に、中学校の現場向にまとめました。

B 5版32ページ。一部三百円、送料百四十円。

▽高等学校家庭一般の男女共学をどうすすめるかは来年発行予定です。

(編集部)